HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大学1年生は高校4年生？ : 高校教育と大学教育の連携を考える : 平成13年度北海道地区大学ガイダンスセミナー報告
Author(s)	鈴木, 誠; 池田, 文人; 土岐, 均 他
Citation	高等教育ジャーナル, 11, 163-172
Issue Date	2003
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.11.163
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29625
Type	departmental bulletin paper
File Information	11_P163-172.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

大学１年生は高校４年生？
―高校教育と大学教育の連携を考える
―平成13年度北海道地区大学ガイダンスセミナー報告―

鈴木 誠[1)*], 池田 文人[1)], 土岐 均[2)], 湯田 恭丈[3)], 和田 健夫[4)]
佐藤 振一郎[5)], 大山 勉[6)], 苫米地 司[7)], 阿部 和厚[1)], 山岸 みどり[1)]

[1)]北海道大学高等教育機能開発総合センター, [2)]北海道札幌啓成高等学校,
[3)]北海道札幌東高等学校, [4)]小樽商科大学, [5)]北海道札幌稲雲高等学校,
[6)]北海道大麻高等学校, [7)]北海道工業大学

Are Freshmen Fourth Year Students in High School?
― Report of a Guidance Seminar in Hokkaido District in 2001 ―

Makoto Suzuki,[1)**] Fumihito Ikeda,[1)] Hitoshi Toki,[2)] Yasutake Yuda,[3)] Tateo Wada,[4)]
Shinichirou Sato,[5)] Tutomu Ohyama,[6)] Tukasa Tomabechi,[7)]
Kazuhiro Abe[1)], and Midori Yamagishi[1)]

[1)]Center for Research and Development for Higher Education, Hokkaido University, [2)]Hokkaido Saporo Keisei High School, [3)]Hokkaido Sapporo Higashi High School, [4)]Otaru University of Commerce, [5)]Hokkaido Sapporo Touun High School, [6)]Hokkaido Saporo Ooasa High School, [7)]Hokkaido University of Technology

Abstract ― On September 21, 2001, teachers of universities and high schools in Hokkaido met together at Hokkaido University to discuss various problems about education, entrance examinations, and so on. This seminar led to the following conclusions.

(1) Many high school students and university students have recently shown a marked decline in the levels of academic attainment.
(2) The university entrance exam has a bad influence on high school education. For instance, only the knowledge for the entrance exam is taught to high school students.
(3) At the university, various information is provided to those who enter the school about the contents of the courses, including subject guidance, etc.
(4) High schools strongly request information on changes in the entrance exams.

The information exchange between high schools and universities will be more and more necessary in the future.

(Received on February 15, 2002)

*) 連絡先：060-0817 札幌市北区北17条西８丁目 北海道大学高等教育機能開発総合センター
**) Correspondence: Center for Research and Development in Higher Education, Hokkaido University, Sapporo 060-0817, JAPAN

はじめに

多様化や個性化をうたった平成６年度の学習指導要領の改訂から，高等学校の教育現場では，いわゆる「狭い履修」が進行した。その結果未履修科目が拡大し，学力低下の問題が指摘されるようになった。そのため，各大学では一定の学力を維持するための様々な「仕掛け」が授業の学習指導の中や，いわゆるリメディアル教育と称する形で，大学の正規の授業として実施される状況になってきている。この流れは，学習内容が大幅に縮減された新学習指導要領の施行を考えると，今後急速に拡大するであろう。

しかし，今まで高等学校では，大学でどのような内容の学力を維持するための「仕掛け」が行われてきたのか，また大学では高等学校のカリキュラムや学習内容がどのように変化してきたのか，といった高等学校と大学との間での共通理解は図られてこなかった。

大学ガイダンスセミナーは，大学入試センターが中心となり，1992年から毎年全国10地区で実施されている。特に北海道地区は，1999年から高等学校と大学の意見交換の場として機能している。そこで，前述した問題意識を基に，今年度は「大学１年生は高校４年生？－高校教育と大学教育の連携を考える」をテーマに２つのシンポジウムを設け，高等学校と大学との共通理解を図ることにした。

シンポジウムの一つは，現行の学習指導要領下での学習内容や学習指導上の問題点を，具体的な実践例から明らかにするものである。そして，各大学で行われている学力を維持するための「仕掛け」について，具体的な教科の実践例からその現状と問題点を明らかにし，学習内容のどこに問題があるのかについて情報交換することをねらいとした。

もう一つは，それを受けて，まず新学習指導要領の学習内容や学習指導上の問題点を具体的な教科で明らかにしようとした。そして，大学が今後高等学校に求める学習内容，求める資質を明らかにし，今まで明らかになったギャップを埋めるために，高等学校と大学の間で今後どのような取り組みが必要なのか，高等学校と大学間の連携の可能性について議論することをねらいとした。

今年度は，大学生の「学力低下」に対応するために，国立大学協会が国立大受験者には原則として大学入試センター試験で「五教科七科目」を課すとするとの提言をまとめたこともあり，高等学校側の関心は大変高かった。シンポジウムの終盤では，これからの問題を含めた白熱した議論となった。その様子は，討議のところで紹介する。以下，実施順にシンポジウムの内容を示す。なお，各発表者の内容については，当日のレジメを原文掲載の形で紹介する。

表１．ガイダンスセミナープログラム

大学１年生は高校４年生？－高校教育と大学教育の連携を考える

シンポジウム１『学習内容のどこに問題があるのか』
サブテーマ１「各教科の学習内容や学習指導上の問題点‐具体的な実践例から」
サブテーマ２「大学ではどのような教育を行っているのか‐具体的な実践例から」

司会	札幌啓成高等学校	土岐　均
	北海道大学高等教育機能開発総合センター	鈴木　誠
報告	北海道札幌東高等学校	湯田　恭丈
	小樽商科大学	和田　健夫

シンポジウム２『これからどのような連携が可能か』
サブテーマ１「新学習指導要領の学習内容，学習指導上の問題点」
サブテーマ２「高等学校に求める学習内容，求める資質」

司会	札幌稲雲高等学校	佐藤振一郎
	北海道大学高等教育機能開発総合センター	山岸みどり
報告	北海道大麻高等学校	大山　勉
	北海道工業大学	苫米地　司

シンポジウム１
『学習内容のどこに問題があるのか』

1.1「各教科の学習内容や学習指導上の問題点―具体的な実践例から」

北海道札幌東高等学校
湯田 恭丈

1. 学力の低下とは？

(1)「高校全入制」のなかでの学力低下

・高校進学率の上昇（昭和40年代～昭和50年代の高度経済成長期に90数%に達する（実質的高校全入））
・基礎学力が不足している生徒の爆発的増大（アルファベットや四則計算ができない生徒）
・進学校と底辺校，普通科と職業高校・定時制
・授業秩序の維持，倫理観の喪失→魅力ある授業・わかる授業の工夫，カウンセリングや生活指導

＊高校全入が国民全体の願いであるならば，教師として低学力の生徒を排除していくことはできない

(2) 大学受験のための知識（知識の断片化，画一化による学力低下）

・大学受験が高校生の知識の質を変質させている
→受験参考書や単語帳の頻度順（「出る順」の配列）
→受験に重要な知識（教科）とそうでない知識（教科）→知識は本来の意味から切り放され大学受験から数カ月たった段階で失われていく→また，知識の質も相互に関連のない断片的・画一的なものに変質していく。
・大学受験が保護者や教師や社会全体の人間観・価値観を変質させている
→保護者も大学受験に有利とならないものを排除する→生徒会・部活動などの排除・家の手伝いより勉強→過剰な競争意識・利己的な生き方の肯定・学歴崇拝（ブランド志向）

＊学歴信仰・大企業信仰の崩壊で価値観の転換が迫られる。教師や保護者の意識改革とバランスのとれた教育活動の必要性。

(3) 高校の教科配置の削減による学力低下

・現行教育課程における高校の科目数の削減（制度的・物理的側面）
　ア　隔週週休２日制による週時数の減少→１週34コマから31.5コマへ→３年間で７～８コマ減少
　イ　家庭科共修と単位増→「男女が協力する社会」は国民的課題
　ウ　学習指導要領による必修科目の減→理科の場合２科目でよい（ただし，１科目あたり理系では・Ｂ・・で６単位）
・大学入試の科目削減・アラカルト，入試に関係ない教科の意欲の低下（大学入試に合わせて教育課程を「特化」させた側面）

＊基礎的な教科の配置の必要性はある。しかし，完全週休２日制で，全ての教科科目を配置することは物理的に無理がある。

(4) もう一つの低学力（学力を獲得するまでの過程に問題がある）

・学力低下の複数の要因→母子密着，塾や習い事，偏差値，努力の過程より結果が求められる社会
・知識量や解答のスピードはある→自分で工夫して学習したことがない
・塾の類似問題をやって高校合格
・定期テストも市販の問題で
・ゆりかごから墓場まで母親が指示する母子密着→レールの上しか走れない

＊学習活動の自立性（自主性）の回復，画一的指導から個性的・多様な指導，試行錯誤を許す学習

2. 高校の学習内容・授業内容の問題点と展望

(1) 高校の授業内容の問題点（大学入試の制約）

・膨大な知識量→まだまだ残る知識偏重，総授業時数の減少の中で大学入試に必要な知識量は変わらない→大学入試問題と授業
・精選の限界→教師による授業の合理化の限界，自主的な学習の姿勢を育てなければ無限に時間は必要
・科学的な思考力・探求心・学習に対する意欲を育てる授業とは何か

＊生徒や保護者の切実な願いに答えながら，科学的な思考力・探求心・学習に対する意欲を育てる授業を創造する努力をしなければならない。

(2) 総合的な学習の時間（教科を総合する能力・探求心を育てる教育）

・小論文やレポート→自ら学ぶことの重要性（自らの興味関心から学ぶこと，その仕組みを作る）→白紙からの創造，興味関心に合わせ多様な学習, 画一的（客観的な評価基準の見直し）→科学的思考力（仮説→実験・観察・調査→結論）や論理性，教科を統合する力を養う
・（疑似）体験学習・グループ学習・進路学習→自己と他者を考え，進路を考える

3. 高大接続に期待するもの

（1）相互理解による大学受験の質的変化への期待
（2）高校と大学と社会のつながり（高校と大学の連携）

授業や単位の互換・総合的な学習として・体験的な学習　（英語以外の語学や国際文化・考古学・裁判制度・地球物理・分子生物学の基礎 etc）

4. 国大協の科目増の影響

→「詰め込み」か，生徒の自主性を育てる道か

1.2「大学ではどのような教育を行っているのか―具体的な実践例から」

小樽商科大学
和 田 健 夫

1. 小樽商科大学における教育課程の改正

（1）平成９年度の教育課程の改正：大学設置基準の大綱化にともなう改正
一般教育科目の改編，くさび型カリキュラム
（2）平成13年度の教育課程の改正：大学改革の課題を取り入れた改正
教養教育の充実：１年次教育のための科目の新設（「知の基礎」系科目）
専門教育の見直し：専門教育のウエートを相対的に下げる
夜間主総合コースの設置：入試における一括募集
その他：履修指導教官制，履修上限制，Ｆ．Ｄ.，インターンシップの導入

2. 教養教育

（1）小樽商科大学の教育理念

教育理念：専門的知識のみならず，広い視野をもった人材の育成をすることによって，地域社会への貢献，国際社会への対応を果たすことを目標とする。

平成13年度の教育課程改正は，専門的知識の教授（専門教育）だけでなく，「社会に貢献できる広い視野をもった人材の育成」を教育の基本にするための改正であった。それは，大学審のいう「問題探求能力・問題解決能力の開発」に通ずるものである。

（2）１年次教育

主として１，２年次に学ぶ人文・社会・自然科学の諸科目（「人間と文化」,「社会と人間」,「自然と環境」,「健康科学」の４つの系に分かれる）に加えて「知の基礎」という系を設置。

「知の基礎」系では，大学で学ぶための導入教育を取り入れた。大学で学ぶことの意味、社会の様々な問題に対する興味の喚起, レポートの書き方, 討論の仕方, 情報処理に関する基礎的な技術の修得, 大学で必要な数学の知識の修得に関する教育を行う。全教員の協力方式による運用。その他, 履修指導教官による履修相談，履修上限制がある。

「知の基礎」系の科目は以下のとおり：「学問原論」「現代社会の諸問題I」「現代社会の諸問題II」「総合科目I」「総合科目II（エバーグリーン講座）」「情報処理入門」「基礎数学」「基礎ゼミナール」。これらはすべて２単位（半期で終了）である。学生はこのなかから６単位の履修が義務づけられる。

効果:どれだけの効果があったか。学生の対応。担当する教員の確保。教員の意識・理解。

（3）補習授業

英語と数学。それ以外の特別な補習教育は行っていない。

3. 専門教育

各学科（学問分野）の垣根にとらわれない幅広い学習を可能にするカリキュラム。一般教育担当の教員も, 各専門分野の科目を専門科目として講義し, ゼミを担当する。学生は興味に応じて科目を選択できる。専門教育においても, 教養教育の目標（課題解決能力の開発）を踏まえた授業運営を旨とする。

討議１

大学　筆記試験の場合，ある程度客観性を要求される。したがって知識の断片化や画一化された知識を問うのは避けられない。高校側での授業の中で, そういう断片化された知識に到達するまでのプロセスというものを重視する授業をおこなう意識も必 要ではないか。また，ＡＯ型の入

試は，客観性がわかりにくいが，論理性やコミュ ニケーション能力，創造性やチャレンジ精神といったトータルな人間性を判断できる。高等学校側はどのような印象を持っているのか。

高校　知識を獲得するに至るまでのプロセスを重視するような教育課程を組むべきである。長い目で見れば，日本の社会全体に大きな影響を及ぼすのではないか，またその意識をやはり教員が持つべきだと思っている。しかし，膨大な入試に対する知識量は必要である。これではいけないと思いながら，高校の教員はやはりそれを繰り返している。

高校　大学の方から高校に対して，問題解決能力や発見する力，そういうことに対するここまではやっておいてほしいだとか，こういうふうなことはぜひ取り組んでほしいといった要望をお聞きしたい。また，大学が期待する「大学で学ぶことの意味」ということと，高校生が答えて考えて結論を出して受験していくというギャップについて，大学はどのように考えているのか。

大学　高校での教育がきちんとしてないから，カリキュラムの改正をして，知の基礎系のような「知の基礎」の科目を作ったというわけではない。教育目的でつながった教育の課題を，高校も大学も持っているわけで，高校での教育と，大学での教育が，つながっていくようなものでなくてはいけない。また，課題探求能力というのは，高校のときにあるここまで，大学に入ったらここからここまでというような途中で切れるようなものではない。一貫して長い年月をかけて形成されるものである。やはり高校生諸君には，学ぶことの習慣と知識を身につけてもらいたい。

高校　課題解決能力や探求能力が果たして大学生が本当にないのか。何か問題を見つけ，協議するための題材を集め，問題を探るといった場面は，多々見られる。果たしてそれほど嘆くべきひどい状況なのか。

大学　高校までにそぎ落としてほしくないと思うものに知的好奇心がある。推薦で入学してきた生徒は学力は劣るが知的好奇心があり，いろいろな伸び方をしている。高校の先生方も与えるようにしていただきたい。

高校　私の学校は進学校であり，いろいろなものをそぎ落としているのかもしれない。しかし，一人一人の生徒を見ると，知的好奇心の高い生徒は必ず存在する。それを個別に刺激を与えて，知的好奇心を伸ばし，生徒の活力が出るように刺激することがとても必要である。ＡＯ入試に大変期待している。もっと面接や小論文，活動歴やポートフォリオを多用し，トータルに人間を評価しながら，学部学科のアドミッションポリシーとマッチングさせることが大切である。それが，高校教育を変えていくことにつながる。

大学　ずいぶん長い間参加型の授業をやってきた。高校生のときに授業に参加する機会を与えられてこなかった生徒たちがいる。高校で学力が足りないということよりも，そういう生徒たちが，大学で活躍できる仕組みを作ってあげると，自分で知的好奇心をかき立てられていく例はたくさんある。

シンポジウム２
『これからどのような連携が可能か』

2.1「新学習指導要領の学習内容，学習指導上の問題点」

北海道大麻高等学校
大山　勉

まず，お集まりの先生方の中でも話題のことと思いますが，日本の中高生は，将来，結婚しなければならないと思っているものは20%（男子30%・女子12%：米79%・韓51%・仏30%）だそうです。これは，日本青年研究所が日・米・仏・韓４カ国の中2と高2の各1000を対象に昨年７月おこなった調査の発表であります。さらに，今の社会に対しての満足度は９％（米72%・仏54%・韓19%），21世紀が希望に満ちた社会であるとこたえたのは34%と4カ国中最低（米56%・韓71%・仏64%）であることで，私たちが21世紀を託す少年達の閉塞感を浮き彫りにしていると述べています。

この調査について，質問の意図や形式，対象者の選定や場面が判らず，お国事情や国民性が異なっているので，そのまま，鵜呑みにするつもりはありません。しかし，少なくとも，私たち教育現場にいる者と

しては，驚きであり，また，うなずきでもありました。他国との比較によって（なにせアメリカは，いずれも70～80%，お隣の韓国からみても半分以下の数値ですから），一層深刻な危機意識を持ってしまいました。

このことは，子供たちが現実の社会に不満を持ち，将来に夢もないということを現しているわけです。だとすれば，それは，大人の責任ということですから。「なんとかしなくては・・」という気持ちになってしまいます。

今日は，このような，報告者という立場でここに来てしまいましたが，私にとって，朝から貴重な勉強の機会となったことを感謝しております。また，私のこれからの報告内容がテーマの主旨に即したものかどうか，はなはだ不安でありますけれど，皆さんから多くのご指摘や情報をいただき，意見交換の口火となれば幸いと存じますので，よろしくお願いします。

1. 本校生の実情

まず，本校は，石狩第６学区に属し，普通科10間口（30クラス）の江別市内の公立３校，私立２校の内のひとつですが，同時に石狩第２学区（厚別・白石区）から無条件で受検ができる特例校でもあります。札幌圏ということで，地域の教育への関心度も高く，多種多様な教育環境が存在しています。本校生の家庭の経済力や教育力は比較的高いと思われ，各種説明会や面談等の参加状況などから学校に対する関心や期待も大きく，全体的には協力的と考えます。

（1）進路分析：入力と出力　（現１・２年生と最近２年間の卒業生から）

学区改編2年目の影響もあると思われるが，札幌市からの生徒が増加傾向（札幌市41%，江別市56%），中学校の学習成績Ｄ～Ｅランクの層が中心（70%）である（Ｄランク以上は60%を越えてきた）。

① 入試学力点は，平均230点前後であり，⑦217～⑤252を取る層が厚く，70%前後（18期生67%，17期生77%）はここにいます。

② 前年度の卒業生の進路最終決定先は，大学進学は70%（国公立四大20%，私四大44%，短大6%）他予備校16%，専門（看護含）学校13%，就職1%（一昨年同様）

③ 入学時の学力と３年後の学力は，必ずしも相関関係にあらず，入試点210点前後（下位層）の生徒も北大（理），小樽商大，教育大など国公立大や私大等の志望する進路達成を果たしているわけです。これは，高校に入ってからの取り組み次第ということでありますから，教師の指導意欲も湧いてくるわけです（校内的に本校教員は実に熱心です）。

※傾向として：短大減少，四大・専門学校増加。学力にかかわらず進路先は多様化している。進路目標は，国公立大，私立４大への進学希望が80%（現２年生88%・３年生82%）を越えていますが，中身は文系大学への希望が増加，理系大学は減少している（トップ校とは差がある）現象です。大学進学の動機は，知的な興味（50%）をあげるが，将来の就職や資格取得と関連づけてきている色合いも濃くなっている（就職難を反映？）。

（2）生徒意識調査分析（最近３年間の全校生のアンケートのまとめ）

① 学校で友人との交流は楽しいが勉強はしたくない。内面校則や教師に不満もあり，友達づきあいや校外生活で欲求不満解消。悩みは，勉強であり，将来の進路である。

② 自己実現の意思は持ちながらも，具体的な進路目標や学習の手立てがつかめない。勉強からの逃避願望が潜在し，日常生活が享楽的である。教師との接触も少ない（相談相手を教師とするは数%）。

◎生徒は，教師の指導に良くも悪くも従順的であり，落ち着いている。ただし，基本的な生活習慣（挨拶や時間・服装など）の定着化が困難化し，自主性に欠け，規律にルーズな傾向が強くなってきた気がする（まだ，教師の指導性の発揮で改善は可能な範疇か）。

◎家庭学習30分以下が46%⇒全国的傾向

進研模試結果（１・２年次）によれば，SS50～59の層が多く（47～55%），学年が進行するに伴い，この集団が２極化していく現象がみえる（集団の前引き，後押し対策が必要である）。

2. 移行期（H13・14年度）カリキュラム編成の実情

（1）学校週５日制への対応（今年から２学期制導入）と新学習指導要領実施への連結を目的としたが，現行学習指導要領との整合性から一部軌道修正をはかる。（必修単位数の関係）

（2）２年次からの類型選択をやめ，３年次のみ類型選択に変更した（２年次理系希望80%以上に対応する：国公立志望者の増加や進路が決まらないモラ

トリアム層の増加による）が，生徒の選択幅を狭めたことや受験科目に対応ができるか課題も残した。

3. 新教育課程編成の要件と課題

昨年度から，平成15年度新教育課程実施に向けて，SG（総合的な学習の時間）検討委員会や情報教育委員会が発足し，包括的に新課程の検討を進めている。上記の移行期カリキュラムを踏まえながら，まず，開校以来の18年間を検証し，ＳＩの構築からスタートしているところです。

(1) スクール・アイデンティティ（ＳＩ：学校目標）の構築

※「どのような生徒を迎え，どのように育てるか」:『麻高のめざす姿』として，学校のカラーを打ち出すべきとした

柱の１つめ：生徒や地域の期待に応える学習環境づくり

柱の２つめ：進路実現に向けた明確なプロセスを説明すること（そのためのカリキュラムや進路指導の３年間のシラバス作成）

(2) 出入口（接続）を分析（高校を中心にすえた見方）する必要があります。

＊ 中学→高校→大学の学習指導の連続性:中学の学習カリキュラムを各教科で検証することそして３年後の大学入試対応(早めの情報収集と分析そして生徒への指導)

＊ 入試制度の影響（学区制変更や学校裁量６：４，４：６などによる生徒の分析：３年間の追跡調査と分析まで後１～２年必要である）

＊ 私立中高一貫教育校の存在を意識している(中高の連続性受験に対する学力差)。市内私学の存在がある。(学校が選ばれる時代へ入っているため，公立といえどもPR作戦も必要と考えます)

(3) 新教科「情報」と新学力「総合的な学習（SG)」をどのように生かすか。

検討事項

1.「情報」は１年次２単位が理想的だが配置は困難か。科目ABC含未決定

2.「ＳＧ」は進路学習中心で各学年１単位配置か。未決定：中身が問題です

(4) 少ない枠組み（標準30単位，50分授業）での対応：受験教科対策をどのように講じるか。

4. 進学校としてのジレンマ：新学習指導要領（目標）と受験学習指導（目的）とのギャップは埋められるか。次の３つの難題がある。

(1)「ゆとり」の中で「生きる力」を育て，基礎基本の定着を目指すカリキュラムと多様な進路実現に対応するカリキュラムの両立は困難：総単位数（90単位）の77%は主要５教科が占める。(国英数53%，理社24%）現実は変わらない？ＳＧや情報は他教科との分配となる？

(2) センター試験の動向に注目：本校生の75%（300名）のセンター受験組に対応しなければならない（５教科７科目対応，さらには理科３科目に対応するカリキュラムを用意できるか？現実，カリキュラムの上では，2004年度入試には間に合わない)。

(3) 大学受験方法の多様化に困惑している：進路（学習）指導の充実をはかり，情報収集と分析の迅速化と即効性のある現実的な対応（小論文・面接指導，２次対策や評価法の見直し）を講じなければならない。

※大学側が，「求める学生像」を入試の選抜方法の多様化によって，選ぶことは当然である。今後も大いに大学がメッセージを発信すべきだと考える。その際，高校側では，早く的確な情報がほしいということである。また，高校も明確に選ばれる時代に入り，中学生（保護者・中学校）に対して，学校をPRする必要が出てきている。

最後に，本校生の実態や意識が，先ほどの日本の若者の風潮と重なるとすれば，子供たちが，義務９年を終え，高校入学から3年後，7年後，10年後を想像するとき，やはり，学校教育の責任は重大だと思います。小・中・高・大（または社会）と連続した中で，役割分担と連携を考えなければならないと思う。

今，我が校では，生徒に何を学ばせるべきか。この変換期の中で本校独自の羅針盤を持ち，生徒の自己実現を図るかじ取りは，どうあるべきか。カリキュラム編成を基軸とした議論が始まっています。しかし，これは，とても重みのある課題に直面しているわけです。

以上，とりとめもない内容となってしまいましたが，報告を終わります。

2.2「高等学校に求める学習内容，求める資質」

北海道工業大学
入試部長　苫米地 司

1. はじめに

大学受験において高校生は，何を尺度に大学を選んでいるのでしょうか。高校の進路指導では，大学の何を尺度に指導しているのでしょうか。現状をみると，偏差値が全てと言わざるを得ません。こうした状況の中で大学に入学してきた高校生の修学状況はどのようになっているのでしょうか。北海道工業大学を例に，入学後の修学状況を分析し，高等学校における学習内容を考えてみます。

2. 北海道工業大学における入試制度別の修学状況

北海道工業大学は，2001年４月に６学科から８学科体制に改組改変しました。この改組改変を機に，本学の求める学生像を明らかにすべく，入試制度別の修学状況および卒業後の動向について種々の分析をしました。その結果，専門高校から推薦入試で入学した学生の留年率が約4.5%と低く，学業成績も極めて良いことが明らかとなりました。これに対して，センター入試で入学した学生の留年率は10%を越え，学業成績も悪い場合が多いことが明らかとなりました。

学生との面談結果をみると，専門高校から入学した学生の多くは，本学が第１希望であると同時に目的意識を明確に持っています。さらに，入学前にオープンキャンパス等を利用して本学を何度も見学し，本学で「どのような環境の中で何を勉学できるか」を確認しているところに特徴があります。これに対し，センター入試で入学した学生の多くは，本学が第２，３希望であることや入学前に本学で何が勉学できるかを十分に確認していません。

3. 高等学校に求める学習内容

専門高校から入学した学生の多くは，高校での学業成績が優秀であると同時に実験や実習を通じて，勉学の内容と社会との接点や自分自身の適性を確認して進学しています。これに対して，普通高校から入学した学生の多くは，入学後における勉学の内容と社会との接点や自分自身の適性を確認する機会に恵まれていません。基礎学力を高めるための指導や自分自身の努力も必要でありますが，進学を希望する学科の「勉学内容と社会との接点」について学ぶことも極めて重要と考えます。高等学校の進路指導においても重要な課題と考えます。さらに，「自分自身の適性」を見極めた結果としての進学であれば，知的好奇心も湧いて勉学意欲が継続すると考えます。

高校生に対する入学後の「勉学内容と社会との接点」に関する教育については，大学の果たす役割が大きいと考えます。多くの大学で実施している「出前講義」等を利用して，単発的ではなく継続的に「勉学内容と社会との接点」を教育するカリキュラムの構築が必要と考えます。本学では，「勉学内容と社会との関わり」に主眼を置いた６～８単位におよぶ入門教育を１年前期に全ての学科で実施しています。現在，その効果を検証しています。

4. おわりに

知的好奇心に溢れた多くの大学生がキャンパスを埋めるには，偏差値以外の尺度で大学を評価する必要があると考えます。現行の入試制度には多くの改善が必要でありますが，高等学校における学習内容の再考も必要と考えます。高等学校と大学との連携の中で，ぞれぞれの改善点を考える機会となることを期待します。

討議２

高校　出前授業といった単発的ものではなく，年間の授業の中に位置づけられた高校と大学の授業の連携は可能か。

大学　私どもの大学では十分に可能だ。すでに，地方の教育委員会からの依頼で，４回連続の模擬講義，ミニ大学を毎年やっている。

高校　入試制度の多様化は，本当に大学教育や高校教育にとって良いのだろうか。今の入試の多様化が，大学に入ってからいい面が出ているのかどうなのか。今後，この多様化はどのように進んでいくのか。

大学　ＡＯ入試や推薦入試で入学してくる学生の勉学意欲は，非常に高い。大学生活の初期のころは学生全体を引っ張っていくというかたちになっていて非常に良い。４年になっても，ゼミのリーダーとして，大学全体を引っ張っていく源

になっている。ＡＯ入試に関して，確かに基礎学力が低い学生もいるが，豊かな個性を持ち合わせた人間がたくさん入ってきている。そういう学生たちが，前期の段階で非常に活発に他の学生を引っ張りながら成長してきている。偏差値で評価されるような入試は，やめたいと考えている。大学に入って伸びる学生をどう集めるかということを，今一生懸命考えている。大学に入って伸びる学生を，我々大学で受け入れて再教育をして，社会に責任を持って出していくというかたちに，これからどの大学もそういう方向にならざるを得ないのではないか。

高校　高校教育の中で面接や小論文というのは，メジャーな指導ではない。あくまでも高校教育は，一番先生方が熱心にやっている教科指導で入試を決めてもらいたい。教科指導がおろそかになりながら，小論文の指導がどんどん入ってくるのは，高校教育にとってはあまりよくないのではないか。

大学　小論文などは，あまり高校では歓迎されないとのことだが，学力低下という尺度は何かというのが問題である。就学意欲があって，向上心を持ってまじめに勉強する学生の方が，大学に入ってから成長する。

高校　ＡＯ入試や，それに伴う小論文や面接を大いに増やしてほしい。確かに，指導はなかなか面倒である。しかし，生徒を指導するバネになる。

高校　週30コマという授業実数が限られるという制約が新たに加わる。さらにセンター試験の科目が増えるという制約もあり，その中でどうやって大学側が求めるような，非常にクオリティの高い資質を持つ生徒をどの様に育てて行けばよいのか，この部分をどう解決していくかが難しい。

高校　理科３科目受験については，平成16年度からの入試に関しては賛成できない。すでに入学した１年生が対象となり，カリキュラムも決まっており，今これから変更というのは極めて困難である。このところ個性重視，あるいは多様化への対応ということ，それからゆとりの教育というようなことでどんどん単位数が減る傾向にある。一方，生徒のいろいろな要望に応えるために，高校としても多様な選択科目を用意するというかたちで，かなり個別対応的なものになっている。現行の中で，　理科３科目受験というのはちょっと対応できない。来年度は完全学校週５日制，そして総単位数が減っていく中で，どのように入れようかということで，大変苦慮している，高校の事情を考えていただきたい。

高校　高校教育と大学教育の連携を考える際に，入試情報につきましては少なくともカリキュラムができる前にはっきり明示し，高大の連携の中で考えていただきたい。実験や実習が，授業の枠の中でできなくなってきている。知的好奇心を養っていくものが，枠組みの中でどんどん減っていく。入試科目についても，カリキュラム編成前に明示していただきたい。

大学　高校側として，理科３科目をやろうと思えばできると聞いていたが，今その話を聞き，新学習指導要領の下ではかなり難しいという感じで少しショックを受けている。総合的な学習というのは，非常に結構なカリキュラムだと思う。高校側でしっかり根付いてきちんと展開されているのであれば，入試の一つの考え方として取り入れたいと考える。

高校　現実的には無理である。特別なカリキュラムを対象生徒だけに作り，理科は３科目やるけどほかは手抜きだというかたちでないと無理である。理科総合または理科基礎も実施しなければならない現実と，学習量も削られる中で新たに「情報」も入ってくる。

高校　理科３科目を検討したカリキュラムを作ってみた。しかし，大体98コマぐらい必要になる。今ホームルームを抜かすと，これからは87コマしか高校側にはない。物理的には７時間授業，つまり部活動などが全部つぶれていく。大学で必要な科目が３つあるから，３つ設置するのだという発言は，高校の現実にカリキュラムを編成する担当者とよく話し合ってからにしていただきたい。実際には無理なことを，いろいろな理想が絡みあって，例えば教育課程を編成する国民の願いや，それから子供を育てる全人格的な教育，それから文部科学省が指定する必修や，大学が望むもの全部が混在し要求されても，高校は１つしかない。

司会　話を深めると入試科目，総合的な学習のことなどいくつか浮き彫りになった。まだ，大学側と

高校側が詰めていかなければならない部分がかなりあるのではないか。

終わりに

本年度のガイダンスセミナーは北海道大学学術交流会館において，2001年9月21日の午後１時から午後４時まで行われた。セミナーでは，『大学１年生は高校４年生？－高校教育と大学教育の連携を考える』をテーマに，２つのシンポジウムが行われ，高等学校と大学の教育現場から活発な意見交換が行われた。

シンポジウム１では，高等学校側から学力低下について，高進学率の影響，受験勉強の弊害，教科配置の削減，学習過程の変化，の４つの観点から問題が指摘された。また，大学入試によって，高等学校の学習内容に多くのバイアスがかかっていることが示された。それらを改善する手だてとして，高等学校と大学の連携の重要性も指摘された。

また，大学側から大学改革の一貫として迎え入れる学生のために１年次教育や専門教育において様々な改善を試みている報告があった。それは，履修システムの修正だけでなく，大学で学ぶ意義やその方法まで踏み込んで進めているものであった。

これらの内容は，現在，高等学校で直面している問題が具体的に示されており，大変参考になるものである。また，その一部を補完する新しい取り組みが，すでに大学で進められていることも明らかにされたことは，高等学校側にも参考になったと思われる。議論の中で，AO入試がこれらの問題を解決する一つの手段となりうるとの指摘があったことは，注目に値するものである。

シンポジウム２では，高等学校側から自校の進路指導や生徒意識に関する具体的な現状分析があり，学習意欲の低下や家庭学習の減少，また進路指導の難しさなどの問題が細かく示された。また，新学習指導要領へ向けて，スクールアイデンティティの必要性や，中学校から大学まで連続した学習指導の必要性が指摘された。

また，大学側から偏差値以外での大学評価の必要性が指摘された。特に，高等学校で学習する内容が，社会とどのように結びついているのかを意識した学習指導や進路指導の必要性が強調された。これらの内容は，入試を中心とした現在行われている学習指導の質の転換を求めるものであり，今後より一層の情報交換が必要と考えられる。なお，シンポジウムの終盤では，高等学校側から５教科７科目に関する切実な要望が多く出された。大学の入試形態の変化は，高等学校の教育内容に直接大きな影響を及ぼしている。しかし，入試を接点とする情報の交換については，まだまだ不十分であり，その意味でも，今後，より緊密な高等学校と大学との連携が必要であろう。

今年度のセミナーは，高等学校と大学の意見交換の場として，ある程度の機能は果たすことができた。今後，「新学習指導要領の基で，各教科や総合的な学習ではどのような学習指導が必要なのか，また大学としてどのような支援が可能なのか」といった，より具体的なテーマでの高等学校と大学の意見交換が必要であろう。